

平成27年度第3回 I C T利活用教育の
推進に関する事業改善検討委員会

平成27年 7月 7日
佐賀県教育委員会

I C T利活用教育の推進に関する事業改善検討委員会 委員名簿

(五十音順・敬称略・※印は座長)

平成 27 年 7 月 1 日現在

飯盛 清彦	佐賀市立諸富南小学校校長 (佐賀県小学校長会)
石橋恵美子	佐賀県P T A連合会副会長 (中学校P T A連合会)
伊東 猛彦	佐賀県高等学校P T A連合会会長 (高等学校P T A連合会)
大久保雅章	有田町立有田小学校指導教諭 (佐賀県教職員連合会)
甲斐今日子	佐賀大学文化教育学部教授
陰山 英男	立命館大学教育開発支援機構教授 (立命館小学校校長顧問)
齊藤 萌木	東京大学大学発教育支援コンソーシアム推進機構特任助教
坂本 広樹	佐賀県P T A連合会理事 (小学校P T A連合会)
白水 敏光	佐賀県立唐津東高等学校校長 (佐賀県高等学校長会)
田中 康平	株式会社 NEL&M (ネル・アンド・エム) 代表取締役
※ 富吉賢太郎	佐賀新聞社編集主幹
野中 和納	佐賀県教職員組合執行委員長
秀島 正文	佐賀市立大和中学校校長 (佐賀県中学校長会)
堀田 龍也	東北大学大学院情報科学研究科教授
糸井 宏文	佐賀県立鳥栖工業高等学校教諭 (佐賀県高等学校教職員組合)

(県側担当者)

- ・ 古谷 宏 佐賀県教育委員会教育長
- ・ 中川 正博 市町教育長連合会会長 (多久市教育長)、ICT 利活用教育推進協議会副会長
- ・ 福田 孝義 事業責任者 (佐賀県教育委員会副教育長)

I 開 会

事務局からの連絡（第1回記録の確認）

資料1

II 協 議

1 事務局からの報告

- ・平成26年度に実施した指導主事による学校訪問等の中で得られた現場からの声
- ・平成27年度第1回佐賀県ICT利活用教育フェスタ全体会アンケート結果

資料2

資料3

2 委員からの意見発表（主に教育効果の面からの考察）

（1）学校代表者からの意見（小・中）（秀島委員）

（2）教職員組合代表者からの意見（大久保委員）

(3) 教職員組合代表者からの意見 (榎井委員)

(4) 保護者代表者からの意見 (坂本委員)

3 協議

4 その他

III 諸連絡

次回開催 平成27年7月14日 (火) 13:00～16:00
(佐賀県庁新行政棟10階 教育委員会室)

IV 閉会

平成 27 年 7 月 7 日

第 1 回 I C T 利活用教育の推進に関する事業改善検討委員会議事概要

教育情報課

1. 開催日時 平成 27 年 5 月 29 日（金）13：00～16：00
2. 開催場所 佐賀県庁新行政棟 10F 教育委員会室
3. 委員出席者（敬称略）
富吉委員、甲斐委員、石橋委員、飯盛委員、大久保委員、陰山委員、白水委員、田中委員、野中委員、秀島委員、靱井委員
4. 教育委員会出席者
古谷県教育長、中川多久市教育長（佐賀県 I C T 利活用教育推進協議会副会長）、福田県副教育長、土井教育情報課副課長、島川教育情報課副課長 他
5. 議事概要

（1）古谷県教育長 挨拶

佐賀県では、今日の高度情報化、グローバル社会にあつて、教育の情報化の推進は、今後ますます重要となる、コミュニケーション能力や情報活用能力等、いわゆる「生きる力」の育成に有効な手段であり、今後の教育を左右する喫緊の課題と捉え、現在、全県規模で教育の情報化に取り組んでいる。

各学校では、現在、これまで行われてきた教育の良さは維持しながら、そのうえで、I C T ならではの特徴を生かした指導法を取り入れるなど、教育活動の充実に努めていただいている。

県教育委員会としては、学校現場や保護者・県民等の声をしっかりと聞きしながら、期待する教育効果がきちんと発現されるよう、不断に改善・充実につとめていきたい。

（2）中川多久市教育長（佐賀県 I C T 利活用教育推進協議会副会長）挨拶

佐賀県の学校で学ぶ児童生徒の教育を考えると、それぞれの施策を進める上で、県と市町とがしっかりと連携して取り組むことが何よりも重要であり、基本であると考えている。

こうした考えのもと、教育の情報化の取組についても、平成 23 年度の事業開始時から、県と全市町の教育長等からなる「佐賀県 I C T 利活用教育推進協議会」を組織し、定期的に情報提供や協議などを行いながら、事業に取り組んでいる。

確かに、各市町の取組については、それぞれの市町が抱える教育課題等もあることから、各市町とも、それぞれの事情に応じて、I C T 機器整備計画等を作成し、I C T 利活用教育の推進を図っているが、現状をみると、電子黒板等の I C T 機器の整備状況を見ても、必ずしも一律とはいえず、残念ながら各市町でばらつきがみられるのが実情である。

市町教育委員会としても、ICTを利活用した教育の推進が、本県教育の質の向上と発展に寄与することを願っている。

- (3) 土井教育情報課副課長より、ICT利活用教育の推進に関する事業改善検討委員会の趣旨、検討事項、実施方法について説明
- (4) 福田副教育長より、佐賀県における教育の情報化の取組について説明
※ 説明概要及び説明資料はP. 8「佐賀県における教育の情報化の取組についての説明概要」のとおり
- (5) 各委員等からの意見

【富吉委員（座長）】

教育の情報化に向けた国や県の取組状況、デジタル教材の著作権のこと、ネット環境のこと、先生のスキルのことなど、全体的な説明をいただいた。この委員会の目的は、佐賀県のこれまでのICTの取組を振り返り、ブラッシュアップしていくことである。委員の皆さんには、それぞれのお立場から、疑問に思ったこと、分からないこと等自由に意見をいただきたい。

【靱井委員】

総務省「フューチャースクール推進事業」や文部科学省「学びのイノベーション事業」等の紹介があったが、こうした取組以前にも、佐賀県では、教育センターが中心となり、全国に先駆けて、県内の全教員がインターネットにアクセスできる仕組づくり（EDU-QUAKE さが）を行った。全県実施に向けた具体的な取組の一つとして紹介したい。

【田中委員】

佐賀県における教育の情報化の取組についての説明の中には、入試制度の見直し等、時系列的に先進的ICT利活用教育推進事業が始まった後の話も入っているように思えるが、ポイントを絞るべきではないか。

【陰山委員】

校務管理のシステム化という話があったが、通知表や指導要録等、帳簿類の電子化にもきちんと取り組んでいただきたい。

【田中委員】

今日の説明の中には、教育工学の話が出てきたが、内容が漠然としている。具体的な事例なども示していただきたい。自分は教育工学の学会にも入っているが、佐賀県からの教育工学の発表はないようだし、会員も少ない状況である。

【富吉委員（座長）】

新しい授業スタイルになるので、教員のICTスキル次第で取組の差が出るのではないかと。先生方の研修をしっかりとやってほしい。

【中川多久市教育長】

教員のICTスキルはまだまだテコ入れが必要である。確かに、「使える」と答える率は高いが、どの程度使えるかとなると個人差がある。

スキルアップの手法としては、ICT支援員を増やす方法もあるが、学校だけでは対処できない問題である。

【富吉委員（座長）】

教員のICTを活用する力量に差があると、力量のある教員が担当した生徒は得することになる。

県全体でICTを推進するのであれば、教員のICTレベルを平準化すべきである。

【富吉委員（座長）】

昨年の高校生ICT利活用プレゼンテーション大会に参加したが、素晴らしい取組だと思う。参加者がもっと増えるようにしてほしい。

【秀島委員】

ICTの利活用スキルの面からの事例として、昨年、自分が在籍した学校では、教科や年齢によって先生方のスキルの差が大きく、積極的に活用する先生方は少ないような状況である。

ICT機器の導入に伴いスキルが身につくと考えるところであり、使うことによって身に付けることも必要と考える。

【中川多久市教育長】

多久市の取組を紹介すると、多久市ではICT支援員を常勤で10人を3年間配置した。ICT支援員へは、教員に対して積極的に助言、指導を行うよう指示して、先生方が「使わなければいけない」と思うような状況を作り出すことで、推進を図った。

【飯盛委員】

ICT利活用教育のスタート時は、50代の先生の中にはICTに対する拒否反応があったが、ICT支援員を4校に1名配置していただいたことで、ICTを使うという状況になった。義務制は市町の予算でICT支援員をつけているので、実態がまちまちである。

また、若い教員は、採用試験にICTを利活用した試験もあるため、ICT機器の利用頻度は高いが、その前提となる指導法については、知識に

乏しいという事例もある。両方を伸ばす必要がある。このことがICTスキルを伸ばすための壁とも思う。

【靱井委員】

スキルの凸凹はあるが、電子黒板の導入はありがたかった。教育現場では、ICTを使わない教員は非常に少なくなっており、すそ野は広がっていると考える。また、現場の外から思われるよりも使われていると考える。

自分も、英語の授業では、映画を使ったICT教育は効果的と考えており、授業で活用している状況である。

【大久保委員】

自分の所属する学校の事例では、教員の平均年齢が高かったが、今では、みんながICT機器に便利さを感じて使うまでになった。ただ、教えられた範囲での活用しかできておらず、使いこなすまでにはいたっていないように感じる。

各学校にICTに堪能なスタッフ、教員が常駐していることが大事と考える。

【靱井委員】

教員は、パソコンの端子、スイッチの位置等、初歩的なことが意外と分かりにくく操作に詰まっている。ICT支援員のちょっとした指導、助言が効果的と考える。ICT支援員の効果的活用をぜひお願いしたい。

また、ICTに堪能な教員もいるので、ぜひ掘り起こしていただき、やる気を引き出したうえで、教育現場のリーダーとして活用してほしい。

【中川多久市教育長】

確かにそれも必要だが、学校全体に広げる上では、ICTに詳しい人が使った後は、他の人がしり込みして使えないという状況にならないようにしなければいけないと思う。

【陰山委員】

全教室に電子黒板を整備できたら、全電子黒板をネットワークでつなぎ、誰かが作ったデータをみんなで活用するなどの共有化は絶対必要だ。

電子黒板もデュアルで使える環境があればよいが、教室に1台だけだと、電子黒板は使いすぎると画面を次々に映しかえるため、子供たちにとってはかえって使いにくくなることもある。また、一人一台のタブレットが入ると、内容によっては、電子黒板の画面を見せることがかえって邪魔になるといった弱点なども克服する必要がある。

デジタル化というと、とても高い山を想像して取り組んでいる人もいるが、例えばパワーポイントは3枚まで、4枚以上不可とかでスタートして

はどうか。ICT支援員よりハイレベルな教員の話聞いたが、レベルの高い人は高く、低い人は初歩的であることを踏まえても、パワーポイント3枚程度作るとは、どんな教員にもできるはずである。

子供たちにおいても、基礎スキルを持った子は伸びる。デジタルな授業の初歩スキルに焦点をあてるべきだ。

基礎スキルとは何なのかを測るべきであり、気付かせるトレーニングを徹底してやるとよい。先生は、3枚のパワーポイント資料から子供がどれだけ指導内容を理解しているか、能力を引き出せたかを測る必要がある。

【甲斐委員】

佐賀県はICT機器の整備は相当進んでいると感じている。昨年の高校生ICT利活用プレゼンテーション大会も審査委員として参加し、感銘を受けた。

他方、佐賀大学においても、国が示す入試改革への対応を検討している。基礎学力の評価はどこでされるのかといった課題もある。ICTには子供たちをひきつける効果はあるが、学力の定着や学力の底上げにどうつながるのかといった分析が求められていると思う。良い点と改善すべき点の分析が必要ではないかと思う。

【富吉委員（座長）】

子供のデジタルスキルはどうあるべきかということについても、この委員会で話し合ってみるといようなこともあってよいのではないかと思う。

【田中委員】

自分は、活用能力一覧表を基にした、子供のICTスキルを測るスクールを実施している。

ICTを活用した学習のための観点、ICT環境整備の観点等、論点を整理した方がよいと考える。また、小学校、中学校、高校で、それぞれの学校現場の教育環境が違っているので、区分して考えなければ話がみえなくなると思う。

(6) 諸連絡

次回開催日 平成27年6月9日（火）12:00～14:00

参考 佐賀県における教育の情報化の取組についての説明概要

<学校教育を取り巻く環境変化への対応について>

- ・今日の高度情報化、グローバル社会に対応した教育の実現が求められている。国では、教育基本法の改正や学習指導要領の改訂等、教育改革の動きが進んでいる。また、PISA 調査の結果分析の中でも、教育の情報化の必要性が示されている。
- ・新型インフルエンザや地震、風水害などの自然災害等の発生時の対応や不登校、特別支援教育対象者への教育機会の確保といった意味でも、有効性が示されている。

<佐賀県における教育の情報化の主な取組について>

- ・佐賀県では、平成 16 年度に校務用パソコンの整備に着手したが、全国的にみて早い方ではなく、動きとしてもゆっくりであった。その後、国において、教育基本法の改正など、21 世型教育への移行の方針が示されたことなどもあり、教育の情報化の取組が一気に進んだ。
- ・学習指導要領の改定の動き等もあり、平成 20 年度からボード型電子黒板の試行導入や県独自の e-ラーニング教材の開発、Web 版学習プリント配信システムを活用した指導モデルの試行等の取組を経て、また、国が進めるフューチャースクール推進事業に参加するなどの経験を踏まえ、平成 23 年度に「先進的 I C T 利活用教育推進事業」として事業化し、本格実施となった。

<日本における主な教育改革の動きについて>

- ・平成 18 年の教育基本法の改正以降では、教育の情報化ビジョンの策定や「日本再興戦略 - JAPAN is Back -」の閣議決定、「世界最先端 I T 国家創造宣言」、「知的財産推進計画 2014」の公表が行われるなど、教育の情報化推進の動きが強まった。
- ・教育の情報化を考える上で、特に、高校という観点で考えた場合、卒業後の進路にどうつなげるかという課題があるが、平成 26 年 12 月に中央教育審議会から「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の活用方策イメージが示されるなど、大きな動きがあった。

<全県実施に向けた具体的な取組概要について>

- ・本格実施は、学習指導要領が改定時期にあわせ平成 23 年度からとなるが、教職員研修をとおした人材育成と電子黒板や情報端末等の整備、そして、県独自の教育情報システムの構築。運用を行ってきた。また、全県実施に向けては、佐賀県 I C T 利活用教育推進協議会を設置し、県と市町がしっかりと連携して取り組むという形を取っている。
- ・こうした取組の結果として、教職員の指導力については、これは意識調

査の結果ではあるが、ほぼ全ての教員が「授業中にICTを活用して指導することができる」または「ややできる」と答えていただいている。

<これまでの取組を振り返って>

- ・まず、学校からの声として、電子黒板は評価が高い。授業をアシストする道具としてよく活用されている。児童生徒からも授業が分かり易くなったとの評価は高い。
- ・対して、情報端末、学習用パソコンについては、まだまだ戸惑いも多い。教員は、自分の過去の経験なども踏まえて指導法を工夫しながら、より分かり易い授業を行うものだが、一人一台の学習用パソコンとなると、まったくの未知の領域である。学校からは、頭で理解できていても、生徒の前でいざ使うとなると、経験不足からの不安もあって、しり込みするような場面もあったと聞いている。
- ・これについては、「機器を使うことが目的ではない」「必要な場面で使って欲しい。授業の質を向上させていただきたい」とお願いしている。また、この学習用パソコンについては、これまでの一斉指導の中だけで使おうとするとやはり限界がある、アクティブラーニング等、新たな学びへの移行が必要であることをお願いしている。
- ・教育委員会として早急に解決しなければならない課題としては、「教育学の視点に立った新たな教授法の確立」「教職員の経験不足からくる不安の解消」「デジタル教材の確保（著作権の取扱い）」の3点がある。
- ・また、児童生徒の指導という意味では、情報モラル教育、利活用スキルの育成が不可欠であるが、例えば、大学ICT推進協議会と協定書を取り交わし、全生徒に情報倫理ビデオを導入して指導の強化を図った。
- ・その他、学校支援については、今年度、これまでの取組を強化する目的で、ICTサポーターの派遣と自主教材作成支援、ヘルプデスク現地員の配置等、体制の強化を図った。

<改善充実に向けた取組について>

- ・こうした取組については、県立高校での本格実施2年目となることから、改めて、アンケート調査等を行いながら、課題を洗い出すとともに、これまでの取組を振り返り、総合的な検証を行い、必要な対応をとることとしている。
- ・そこで、本日がその第1回目となるが、また、皆様方には、無理をお願いすることにはなったが、本日、各界の有識者、学校代表者、保護者代表者及び教職員組合代表者、15名の皆様からなる「ICT利活用教育の推進に関する事業改善検討委員会」を立ち上げ、具体的な作業に着手することとした。
- ・県教育委員会では、これまでもアンケート調査や学校訪問等を通して、学校現場の意見や要望等を聞いてはきたが、聞き漏らしはなかったか、

また、判断に誤りはなかったかなど、改めて、委員の皆様からの意見等もお聞きしながら、期待した教育効果がきちんと発現されるよう、学校現場や保護者、県民等の声を踏まえながら、進めていきたい。ご協力をお願いしたい。(以上)

平成27年7月7日

平成26年度に実施した指導主事による学校訪問等の中で得られた現場からの声

教育情報課

以下は、学校からの報告並びに指導主事による学校訪問時に管理職や推進リーダーとの協議の中で得られた、職員や生徒、保護者等からの主な意見（声）である。

1 教員の声**<課題を指摘する声、改善に向けた要望>**

- どの先生も真剣に研究している。学習用パソコンを利用すると効果があるポイントは確かにあるが、見つけきれていないと思う。
- ICT利活用教育において、授業改善を行う際には、もっと生徒の意見を聞いていく必要がある。
- 多くの教員は技術的なことはできるので、これからは、ICT機器、特に学習用パソコンの授業での有効な活用方法の研究が必要。
- 学習用パソコンの活用状況は、教科の差というよりも教員の個人の差が大きい。
- 良い授業モデルがあれば、各学校、各教科でアレンジしていけるので、そのような成功例を多く出して欲しい。
- リーダー研修の在り方として、特別支援学校を対象とした研修メニューも組んで欲しい。
- 電子黒板の場合と異なり、学習用パソコンを活用した授業では、より高いスキルが必要と感じる。
- 推進リーダーにかかる負担が大きい。テストの作り方等マニュアル化されると負担軽減につながるのではないか。
- ICT関係の出張や諸調査は、ネット環境で対応できるものについては、eラーニングを使用するなど柔軟な研修形態を期待したい。
- 電子黒板の利用は進んでいるが、学習用パソコンは教科による使用頻度に大きな差がある。
- 進学校での教科指導における効果的な活用事例を紹介して欲しい。
- モデルとなる授業を見るのが勉強になる。PCを使う目的を生徒に伝えることが大切。
- 職員の作業労力の軽減のためにICTがどのように貢献できるかをさらに考えていくべきだ。
- SEI-Netの教材登録やデジタル小テストの登録が煩雑である。もっと簡単にできないか。
- SEI-Netでは問題登録のハードルが高い。
- SEI-Netのスクールニュースは学年ごとに設定できるようにして欲しい。
- 複数のクラスで同時にする場合、SEI-Netの小テストが実施できない時がある。改善して欲しい。
- メールを自宅で見られるようにして欲しい。
- 新年度のデジタル教材のインストールが上手くいくように工夫して欲しい。

- 紙教材の場合同様、自主教材をもっと活用したいが、著作権の制約が大きく、広がらないという面がある。
- 自分の授業スタイルに応じて自由に編集できるデジタル教材が欲しい。
- デジタルコンテンツは教科によって充実の度合いに差が大きい。教科書会社や教材会社の開発が待たれる。
- 今のデジタル教科書は、紙の教科書と大差がない。現時点ではメリットが少ない。業者には、学校現場の先生の声を反映した教材を作って欲しい。
- デジタル教材のサンプル確認期間を夏休み終了時まで延ばして欲しい。
- デジタル教材は復習でも使いたいので、使用可能期間を3年間にしたい。
- 著作権について、教師、生徒ともに啓発を行う必要がある。
- 電子黒板や学習用パソコンを、どの教員も活用しており、板書の手間を省いたり生徒に興味関心を持たせたりといった点では効果が上がっているが、どの程度の教育的効果があるのかに関して検証が十分でない。
- 学習用パソコンの故障が多い。強度面も考慮して機種選定を行って欲しい。
- 学習用パソコンの故障修理期間が長い。改善すべきだ。
- 予備機は保障がきかないので、不安である。また、予備機にもデジタル教材を入れて欲しい。
- 生徒が学習用パソコンを家に忘れることや充電忘れが多い。学校としても指導の工夫が必要。
- 定時制の生徒は、仕事場にロッカー等がない者もあり管理が難しい。本人が希望すれば、学校での保管も考慮に入れる必要があるのではないか。
- 特別教室は、電子黒板が配備されていない部屋が多く、授業に支障が出ている。配備されれば多様な活用法があり、授業の質がより向上すると思う。
- これはモラル教育が前提にはなるが、学習用パソコンのセキュリティ（制限）については、もう少し緩くしてもよいのでは。
- 机を大きくして欲しい。
- ICT支援員のように、トラブルに対応できる人を各学校に配置して欲しい。
- 実習教諭にもPCを支給して欲しい。工業の実習はグループで受け持ってもらっている。また若手も多いので、活用につながると思われる。

<評価する声>

- 好意的な意見も批判的な意見も両方がある。しかし、電子黒板導入時も当初は「従来の黒板がいい」という生徒もいたが、教師も生徒も慣れるにしたがってそのような声はなくなった。学習用パソコンも慣れる中で批判的な意見も減ってくるのではないか。
- 校内の推進リーダーが、学校の現状に合わせた研修を的確に行うことで、電子黒板や学習用パソコンの特性への理解、必要な場面で使用するということへの理解が進んでいる。
- 各教科での授業研究が進みつつあり、一段高いレベルに入ったように感じられる。教員の授業スタイルや教科の特性に合わせ、どのように授業支援ソフトを使用すればよいか、徐々に判断できるようになってきた。
- 導入されて数年が経つこともあり、「あつて当たり前」という感覚になっている。授業参観を行った学校評議員からも好評であった。

- 年配の先生には難しい面もあるが、前向きに取り組んでもらっている。
- ICTサポーターの学校派遣により、校内研修の充実や教員への個別研修等で機器操作の技能が向上し、教員の不安が解消しつつあり、ICT利活用教育のハードルは低くなってきている。
- SEI-Netや授業支援ソフトのアンケート機能は、その都度、生徒の授業内容の理解を確認できて好評である。
- ホームルームの時間に行事確認や時間割変更の確認が容易になった。
- 総合的な学習の時間での活用（情報検索や発表資料の作成等）に役立っている。
- 新聞の電子版が使えることで、時事問題に関心を持つなど、見識を深めることに役立っている。
- 学年通信や学級通信をデジタル化して配信している。写真等カラーなので好評である。
- 学年便りを紙でもデジタルでも配布しているが、デジタルは画像が多く、保護者や生徒に好評である。
- 英語学習、特に、リスニングやディスカッション等、音声指導や表現力育成の面で役に立っている。
- 数学の授業では、図形を動かすことで、視覚的に理解が進み、生徒の興味関心が高まった。
- 体育の授業で、運動の様子をカメラで撮影したり、模範的な演技をYouTubeで視聴することができるようになり、効果があがっている。
- 専門教科で、カメラ機能を用いた画像や動画を活用し、報告書作成や発表会で活用できた。
- 農業の授業で、植物の観察記録などで利活用され、教科内容の理解に役立っている。
- 部活動でフォームの確認など有効に利活用できている。
- 生徒自身による模試のデータ管理や進路情報の検索が容易になり、生徒の進路指導に有効に利用できた。
- ヘルプデスク現地員の校内常駐により、トラブルに対して的確かつ迅速に対応でき、安心してICT利活用ができるようになった。

【参考】（今年度当初に学校に対して行った意識調査の結果）

質問：ICT利活用教育に対する教職員の理解は進んでいるか。

- 肯定的な意見 （全 32/36、定 2/6、特支 8/8、県立中 4/4）
- － どちらとも言えない （全 04/36、定 3/6、特支 0/8、県立中 0/4）
- × 否定的な意見 （全 00/36、定 1/6、特支 0/8、県立中 0/4）

質問：学校の取組についての評価。

- 現状の取組で十分である （全 14/36、定 2/6、特支 2/8、県立中 3/4）
- － 今後、更なる対応を考えている

2 生徒の声

<課題を指摘する声、改善に向けた要望>

- 学習用パソコンをもっと活用して欲しい。
- 重い。毎日の持ち運びが大変である。
- ネットの接続で早い人と遅い人が出てくるので無駄な時間が出てくる。
- 単にPDF化した教材は、評判がよくない。
- 問題を配布するときは、デジタルだけでなく、紙と両方が欲しい。
- 机が狭い。
- 部活動の時、学習用パソコンの保管に不安がある。
- 定時制なので、登校前の仕事の時は、学習用パソコンの保管が心配だ。
- 学習用パソコンの修理が遅い。
- マウスが欲しい。

<評価する声>

- ICTを使った授業は分かり易い。
- 苦手意識のあった教科でも動画などを活用することで興味をもった。
- 学習用パソコンは自分なりに活用している。使うのが楽しい。
- 一つの道具として、必要なときに必要な場面で普通に活用している。
- 最初は使い方が分からなかったが、使っている中で、少しずつ自分の使い方を身につけることができた。
- (特別支援学校) 情報端末を使用しているときは、楽しそうに取り組んでいる。小学部では多動傾向のある児童でも情報端末を使うことで集中できている。

3 保護者の声

<課題を指摘する声、改善に向けた要望>

- 学校でももう少し有効に活用してほしい。学校で学習用パソコンがあまり使われていないのではないかとの声が聞かれた。
- 生徒にどのような力をつけさせたいのかという説明が必要。
- 具体的な成果(学力向上)がみえてこない。
- 学力向上のためと思っていたが、5万円は高い。
- 自宅でYouTubeばかり見ている。
- 家庭でプリンタを使えるようにできないか。

<評価する声>

- 学習用パソコンを活用している授業を参観して、いい授業だと思った。
- 子供からは、特に否定的な意見や苦情はない。
- 学習用パソコンは有効であると考え保護者は多い。期待は大きい。
- (特別支援学校) 子供に伝わりやすいと思う。
- (特別支援学校) 楽しそうに情報端末を使っているのを見て、家庭でもぜひ購入を考えたいと思った。

平成27年7月7日

平成27年度 第1回佐賀県ICT利活用教育フェスタ 全体会 アンケート結果

教育情報課

平成27年6月9日に、佐賀市文化会館における第1回佐賀県ICT利活用教育フェスタ（全体会）において実施した、参加者のアンケート結果は次の通りです。

全体会参加者 750名 内アンケート提出者 559名 (回収率74.5%)

1 全体集計

(1) 年齢

選択肢	県内									県外・その他				
	小学校		中学校		県立学校		特別支援		計	県外		その他		計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
	267		141		75		16		499	28		32		60
①10代	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0%	0	0%	0	0%	0%
②20代	13	5%	11	8%	4	5%	0	0%	6%	7	25%	14	44%	35%
③30代	22	8%	17	12%	12	16%	1	6%	10%	3	11%	3	9%	10%
④40代	49	18%	32	23%	18	24%	2	12%	20%	10	36%	9	28%	32%
⑤50代	183	69%	78	55%	40	53%	12	75%	63%	7	25%	3	9%	17%
⑥その他	0	0%	1	1%	0	0%	1	6%	0%	1	4%	3	9%	7%
未記入	0	0%	2	1%	1	1%	0	0%	0%	0	0%	0	0%	0%

(2) 教育の情報化について、国の動向や取組に対する理解を深めることができたか。

選択肢	県内									県外・その他				
	小学校		中学校		県立学校		特別支援		計	県外		その他		計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
	267		141		75		16		499	28		32		60
①できた	105	39%	52	37%	22	30%	7	44%	37%	14	50%	11	34%	42%
②わりとできた	157	59%	85	60%	52	69%	9	56%	61%	14	50%	20	63%	57%
③あまりできなかった	1	0%	1	1%	0	0%	0	0%	0%	0	0%	0	0%	0%
④できなかった	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0%	0	0%	0	0%	0%
未記入	4	2%	3	2%	1	1%	0	0%	2%	0	0%	1	3%	1%

(3) 今後のICT利活用教育実践取組の参考となったか。

選択肢	県内									県外・その他				
	小学校		中学校		県立学校		特別支援		計	県外		その他		計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
	267		141		75		16		499	28		32		60
①できた	100	38%	57	40%	19	25%	8	50%	37%	16	57%	13	41%	48%
②わりとできた	153	57%	82	58%	50	67%	8	50%	59%	12	43%	16	50%	47%
③あまりできなかった	6	2%	0	0%	4	5%	0	0%	2%	0	0%	0	0%	0%
④できなかった	0	0%	0	0%	1	1%	0	0%	0%	0	0%	0	0%	0%
未記入	8	3%	2	1%	1	1%	0	0%	2%	0	0%	3	9%	5%

(4) ICT 機器やデジタル教材の理解が深まったか。

選択肢	県内									県外・その他				
	小学校		中学校		県立学校		特別支援		計	県外		その他		計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
	267		141		75		16		499	28		32		60
①できた	74	28%	46	32%	14	19%	4	25%	28%	13	46%	14	44%	45%
②わりとできた	168	63%	85	60%	55	73%	12	75%	64%	14	50%	14	44%	47%
③あまりできなかった	10	4%	5	4%	3	4%	0	0%	4%	1	4%	1	2%	3%
④できなかった	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0%	0	0%	0	0%	0%
未記入	15	5%	5	4%	3	4%	0	0%	5%	0	0%	3	10%	5%

2 第1回教育フェスタに参加しての感想等

(1) 小学校 (県内)

- ・堀田教授の講演が分かりやすかった。
- ・シンポジウムが分かりやすかった。
- ・ICT利活用のためにも学習規律を大切にしたい。
- ・誰でもできる(普及)利活用を進めたい。
- ・今後の道筋が見えた。
- ・本質である教師の指導力向上に努めたい。
- ・基調講演でクラス及び自身の課題が見えた。
- ・ICTに事務職として取り組む考えの機会になった。
- ・子どものためのICT利活用教育に努めたい。
- ・国、佐賀県の動向が分かった。
- ・すばらしい研修だったが、他の出張と重なり全部参加できなかった。
- ・事例発表がブース式で大変よい。
- ・企業展示は最先端が知れてよかった。時間が短かった。
- ・ハード面の充実も重要。
- ・ICT関係の出張が多い。
- ・予算面の支援が欲しい。
- ・半日で行って欲しい。

(2) 中学校 (県内)

- ・基調講演から効果的なICT活用のための素養(学習規律)の重要性が分かった。
- ・佐賀県、武雄市の取組が分かってよかった。
- ・ICT活用をしていかなければならないと思った。
- ・目的ではなく手段であることを再認識した。
- ・自身の学校が進んでいることが分かった。
- ・今回の研修を授業で生かしていきたい。
- ・生徒の手助けになるようなICT利活用にしていきたい。
- ・ICT機器にも触れ、充実した研修だった。
- ・活用するために多忙感が増しているようにも思う。
- ・自治体による差が大きい。
- ・実践例やコンテンツを充実させて欲しい。
- ・実践事例をもっと知りたい。
- ・ブースの事例発表はよかった。もっと現場教員の発表を入れたらよい。
- ・半日研修にして欲しい。

(3) 県立学校・特別支援（県内）

- ・講演が大変よかった。進むべき方向が見えた。
- ・学びに規律が大切だということがよく分かった。
- ・推進リーダーとしてためになった。
- ・国の取組状況、動向が把握できた。
- ・シンポジウムが参考になった。
- ・事例発表が参考になった。
- ・ICTの充実、発展が大事だと感じた。
- ・昨年同様参考になった。
- ・校種、教科ごとの事例がもっと欲しい。
- ・検討のための十分な資料があればよいと思う。
- ・事例発表がソフトの使い方になっているのはポイントが違うように思う。
- ・企業展示が参考になった。
- ・企業展示がこちらにどのようなメリットがあるのか分からない。
- ・もう少し学校判断でツールを取り入れたい。
- ・半日研修にして欲しい。

(4) 県外・その他

- ・学びの多いフェスタであった。
- ・一日の内容が非常に参考になった。
- ・佐賀県の進んだ取組が分かった。
- ・堀田教授の講演が聴きたく参加した。
- ・タブレット活用、協働学習が見られ参考になった。
- ・前日に授業も見たため、講演や事例発表の内容がよく理解できた。
- ・導入の方向性を決める参考になった。高校の取組をもう少し増やしてほしい。
- ・小中の授業が見られてよかった。最前線の声をもっと聞きたい。
- ・学生だが参考になった。
- ・「フェスタ」のネーミングが堅苦しくなくてよい。
- ・学校間ネットワークについて詳しく知りたい。
- ・事例発表が企業による商品紹介が多く残念。
- ・知識、学習習慣がないとICTの効果が発揮されないことを知った。電子黒板、デジタル教科書見学は参考になった。
- ・国、行政の動きがよく分かった。
- ・教師になったらこの学びが活かせるようにがんばりたい。
- ・佐賀県の成功なしには日本の成功はないと感じた。盛り上げましょう。
- ・コンテンツの作り方を紹介してほしい。
- ・ネックになるのは著作権問題だと思う。開発、提供を佐賀大学と連携してほしい。
- ・講演が聴けてよかった。最後まで参加できず残念。

3 第2回 ICT 利活用教育フェスタで取り上げて欲しい事項

(1) 小学校（県内）

- ・タブレット端末実践例
- ・デジタル教材活用法
- ・ICTと児童認知の学術的考え方
- ・児童生徒に見るICT利活用教育の成果
- ・校種別活用事例
- ・教科別活用事例
- ・電子黒板活用事例
- ・プレゼン受賞作品
- ・実践事例とそのポイント

- ・事例情報交換
- ・ICTのメリット、デメリット
- ・特別支援における活用事例
- ・北方小中の指導工夫、成果
- ・学校全体としての取組
- ・情報モラルの効果的実践
- ・デジタル教材作成の仕方
- ・ICT支援員の活用
- ・アクティブラーニング
- ・海外のICT事情
- ・武雄市の取組
- ・各市町の状況

(2) 中学校 (県内)

- ・セキュリティに関する問題点
- ・ICTの問題点、改善点
- ・ICTのメリット、デメリット
- ・教材作成と著作権
- ・SEI-Netについて
- ・具体的実践例
- ・機器最新事情
- ・ICTと生徒の声
- ・職員研修事例
- ・テレビ会議実践例
- ・電子黒板で使えるコンテンツ
- ・ネット依存対策
- ・佐賀県の現状と課題点
- ・生徒のICTスキル育成
- ・発達障害者対応事例
- ・ICT模擬授業
- ・学習状況調査との関係
- ・佐賀県以外の先進的取組
- ・海外事情
- ・各市町の整備状況
- ・アクティブラーニング

(3) 県立学校 (県内)

(高等学校)

- ・現在のツールを用いた事例
- ・デジタル教材の具体的活用
- ・端末を使った事例／海外事例
- ・教科別実践事例
- ・武雄市反転学習
- ・校種別実践事例
- ・高校での実践事例
- ・他県の取組事例
- ・各学校の実態
- ・現場をもとに助言、提案
- ・教育効果が上がった事例

- ・協働学習事例
- ・教材について

(特別支援学校)

- ・ICTのメリット、デメリット
- ・特別支援教育での事例
- ・教材開発、紹介
- ・他県の特別支援の取組
- ・遠隔授業に関する取組